

10月から始まりました、メッセージシリーズ「信仰の継承」も今日で終わりを迎えます。これまでに私たちは、信仰の継承が主の約束、信仰、悔い改め、赦し、みことばによることを見てきました。このシリーズでは、みことばから新しいことを学ぶというよりも、復習的な要素に焦点を当てましたので、そういう意味では、あまり印象に残らないものであったかも知れません。けれども、主イエスは、ご自分のみことばに耳を傾ける人、つまり、自ら進んで主の御声に聴き従おうとする人に、聖霊を通して語れますので、今日もその主に對する求めをもって、みことばに聴かせていただきますよう。

今日のところでは、バプテスマのヨハネが登場してきます。彼が、自分自身と主イエスについて証言しているところです。ある時、ヨハネが人々に水でバプテスマ（罪の悔い改め）を授けていると、弟子たちが彼のもとに来て言いました。26節「先生。見てください。ヨルダンの向こう岸であなたといっしょにいて、あなたが証言なさったあの方が、バプテスマを授けておられます。そして、みなあの方のほうへ行きます」。

このヨハネの弟子たちの言葉から、どんな印象を受けられるでしょうか？彼らがどこか不安を覚えているような様子を思い浮かべる人は、少なくないと思います。というのも、彼らは、ヨハネの弟子ですから、当然、彼に信頼を寄せ、これまでその教えに従ってきたわけです。そして、そのことは他の人々、つまり、ヨハネを預言者だと信じて、彼から悔い改めのバプテスマを受けた人々も同様であったといえると思います。

ところが、そこに主イエスが現れ、バプテスマを授けていたわけですが、人々はヨハネを離れ、主のもとに行ったというのです。ちなみに、この後、4章2節を見ると、バプテスマを授けていたのは、主の弟子たちであったとあります。話を戻しますが、それを見たヨハネの弟子たちは、ヨハネのもとに来て、それを報告するとともに、彼の意見を求めたのです。その際に、主のことを「あなたが証言なさったあの方」と言っていますから、彼らはすでに主のことをヨハネから聞かされていたことがわかります。ヨハネの証言はこうです。

ヨハ 1:29-34「その翌日、ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。『見よ、世の罪を取り除く神の小羊。30 私が『私のあとから来る人がある。その方は私にまさる方である。私より先におられたから』と言ったのは、この方のことです。31 私もこの方を知りませんでした。しかし、この方がイスラエルに明らかにされるために、私は来て、水でバプテスマを授けているのです。』32 またヨハネは証言して言った。『御霊が鳩のように天から下って、この方の上にとどまられるのを私は見ました。33 私もこの方を知りませんでした。しかし、水でバプテスマを授けさせるために私を遣わされた方が、私に言われました。『御霊がある方の上を下って、その上にとどまられるのがあなたに見えたなら、その方こそ、聖霊によってバプテスマを授ける方である。』34 私はそれを見たのです。それで、この方が神の子であると証言しているのです』」。

ヨハネは、主イエスのことを「世の罪を取り除く神の子羊」、「私にまさる方」、「私より先におられた」「聖霊によってバプテスマを授ける方」、「神の子」と証言しました。つまり、この時すでにヨハネは、主イエスのことを来るべきキリストとして知り、弟子たちにもそのように証言していたのです。では、ヨハネは、そのことをどのようにして知ったと言っていますか？水でバプテスマを授けさせるために私を遣わされた方が、「御霊がある方の上を下って、その上にとどまられるのがあなたに見えたなら、その方こそ、聖霊によってバプテスマを授ける方である」と言われ、それを彼が見ることによってです。

ここでヨハネは、主イエスが聖霊によってバプテスマを授ける方、神の子であると証言したわけですが、それは彼を遣わされた神様が、彼にそう言われたからだといっています。そして、彼自身については、「水でバプテスマを授けるために」遣わされたと言うのです。つまり、ヨハネは、主イエスが誰で、何のために来られたかを知るだけでなく、彼自身が誰で、何のために、また誰によって遣わされたかをよく理解していましたわけで。先ほど開いた箇所少し前のところで、彼は自分について聞かれた時、こう答えるのです。

ヨハ 1:19-23「ヨハネの証言は、こうである。ユダヤ人たちが祭司とレビ人をエルサレムからヨハネのもとに遣わして、『あなたはどなたですか』と尋ねさせた。20 彼は告白して否まず、『私はキリストではありません』と声明した。21 また、彼らは聞いた。『では、いったい何ですか。あなたはエリヤですか。』彼は言った。『そうではありません。』『あなたはあの預言者

ですか。』彼は答えた。『違います。』22 そこで、彼らは言った。『あなたはだれですか。私たちを遣わした人々に返事をしたいのですが、あなたは自分を何だと言われるのですか。』23 彼は言った。『私は、預言者イザヤが言ったように『主の道をまっすぐにせよ』と荒野で叫んでいる者の声です。』。

ヨハネのこの答えは、聖書を知らない人にとっては、実にわけのわからないものに思えるでしょう。「荒野で叫んでいる者の声」ですから、自分を何かメッセンジャーのように考えているのか、といったところだと思います。ただ、聖書を知る人、つまり、旧約聖書の預言を知る人にとっては、彼がキリストの前に遣わされた者であることは明らかでした。ですから、その前でも彼自身が言っていますが、ヨハネがこのように自分のことを証言した時、そこには、彼自身はキリストではないということ、けれども、この後、キリストが来られるというメッセージが込められていたのです。

そして、今日の箇所に戻ると、弟子たちから主の報告を受けた時、ヨハネは、これらの証言をもとに、彼らにこう言いました。28-29 節「あなたがたこそ、『私はキリストではなく、その前に遣わされた者である』と私が言ったことの証人です。29 花嫁を迎える者は花婿です。そこにいて、花婿のことばに耳を傾けているその友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。それで、私もその喜びで満たされているのです」。人々が主イエスのほうに行くのを見て、ヨハネの弟子たちがどう思ったのか、実際のところはわかりません。でも、ヨハネ自身は、それを喜んだのです。なぜなら、彼は自分を花婿の友人にたとえ、その花婿であるキリストが、花嫁なる神の民をきよめ、迎えるために来られたからです。そして、ヨハネが、その主の声を聴いたからです。

それがあって、続く 30 節でヨハネはこう言うのです。「あの方は盛んになり私は衰えなければなりません」。この「盛んになる」とは、「育つ」とか「増加する」という意味です。そして、「衰える」とは、「低くなる」とか「減る」といった意味です。ヨハネは、自分がキリストではなく、キリストの前にその道を備えるために遣わされた者であることを理解していたゆえに、キリストは盛んになり、でも自分は衰えることをよしとしました。それが神様の御心であり、祝福であると理解したのです。では、そんなヨハネのことを、主イエスはどう証言されましたか？

ルカ 7:24-28「ヨハネの使いが帰ってから、イエスは群衆に、ヨハネについて話された。『あなたがたは、何を見に荒野に出て行ったのですか。風に揺れる葦ですか。25 でなかったら、何を見に行ったのですか。柔らかい着物を着た人ですか。きらびやかな着物を着て、ぜいたくに暮らしている人たちなら宮殿にいます。26 でなかったら、何を見に行ったのですか。預言者ですか。そのとおり。だが、わたしが言いましょ。預言者よりもすぐれた者をです。27 その人こそ、『見よ、わたしは使いをあなたの前に遣わし、あなたの道を、あなたの前に備えさせよう。』と書かれているその人です。28 あなたがたに言いますが、女から生まれた者の中で、ヨハネよりもすぐれた人は、ひとりもいません。しかし、神の国で一番小さい者でも、彼よりすぐれています』。

主イエスは、ヨハネのことを、預言者よりもすぐれた者、ご自分の道を備える者、女から生まれた者の中で、彼よりもすぐれた人はいない者として人々に証言されました。マタイの並行記事 (11:14) を見ると、主は「実にこの人こそ、きたるべきエリヤです」とも言われたのです。皆さん、このことはヨハネ自身が語ったことではありません。主がそのように証されたのです。主イエスが、どのようなお方を知っている人なら、このように主がヨハネについて証されたのですから、彼がいかに主の選びの器であって、神様に尊ばれた存在であったかは容易にわかると思います。私たちはみな神様の前にも、人の前にも、自分で自分を推薦しようとする者ですが、でもヨハネは、主によってすぐれた人 (Greater) として認められた人です。

にも関わらず、ヨハネ自身は、自分を何者かのように考え、高ぶることはありませんでした。当然のことですが、彼は、自分の方が先に生まれた者だと言って、主イエスと競うことはしなかったのです。なぜですか？すでに見て来たように、彼は、自分がキリストではなく、彼の道を備える者であることを知っていたからです。つまり、彼自身も救い主を待つ存在、神の子羊によって罪が取り除かれる必要のある罪人であることを知っていたからです。皆さん、あなたはどうですか？あなたは自分が何者かを知っておられますか？何のために、また誰によって今ここに生かされているかを存知ですか？

私たちは誰も、少なくとも、この中には、自分のことをキリストだという人はいないでしょう。でも、そのように言わなくても、そのように考えている人はいませんか？まるで自分がこの世を創造したかのように、また自分のことは、自分が一番知っているかのように考えている人はいませんか？あなたは、全知全能なる神様の前に、そのみことばの前に日々へりくだり、この方の知恵と力に満たされ、導かれて歩んでおられますか？それとも、自分の知識や経験に頼んで、何が正しいか良いことか、その善悪を自分の判断で行っているということはないですか？でも何か問題があると、神様や他者にその責任をなすりつけるということはないですか？

ヨハネは、自分がキリストではないこと、それゆえに、自分もまた主を待ち望む者であることを知るゆえに、主が来られ、その声を聴いた時、彼は喜び、人々が主のほうへ行くことを喜びました。そして、この後、ヘロデに捕らえられ、首をはねられることで地上の生涯を終えるわけです。それが預言者よりもすぐれた者、彼よりもすぐれた者はないと主に証されたヨハネの最後であったことをあなたはどう思いますか？ヨハネ自身は、どのように考えたのでしょうか？もちろん彼の思い、考えはわかりません。でも確かなことは、ヨハネは主のために道を備える者、人々にキリストを指し示す者としての神様からの使命を全うした、ということです。主は盛んになり、自分は衰えることが必要であり、それが祝福であることを身をもって弟子たちに示しました。

私たちはみな衰えます。それが記憶力のような脳の衰えであっても、また肉体における衰えであっても、それを避けられる人はひとりもいません。そのような中で、私たちは何に望みを置くべきですか？同じように衰えていく、誰か他の人により頼むべきですか？家族ですか？お金、持ち物、経験や過去の栄光により頼むべきですか？数日前の聖書通読の箇所、ヘブル書1章に、御子イエスについてこのように記されています。ヘブル1:10-12「主よ。あなたは、初めに地の基を据えられました。天も、あなたの御手のわざです。11 これらのものは滅びます。しかし、あなたはいつまでもながらえられます。すべてのものは着物のように古びます。12 あなたはこれらを、外套のように巻かれます。これらを、着物のように取り替えられます。しかし、あなたは変わることがなく、あなたの年は尽きることはありません」。

すべてのものが滅びても、いつまでもながらえられる神の御子イエスに私たちは望みを置かなくてははいけません。なぜなら、主こそ、私たちをやがて来る死と滅びという究極的な衰えから私たちを救って下さる唯一のお方だからです。なぜ私たちは衰えるのでしょうか？それは私たちのうちに罪があるからです。その罪ゆえに、私たちは遅かれ早かれ、衰えなくてはいけない存在なのです。罪ある者が永遠に生きることはないように神様がお定めになられたからです。

でもヨハネが証言したように、主イエスは、世の罪を取り除く神の子羊として来て下さいました。ご自分が世の罪、つまり、私たちの罪に対するなだめの供え物となるため、主は十字架にかかり、その身は裂かれ、血を流して下さいました。子羊の血によって、エジプトで奴隷となっていたイスラエルの民から神様のさばきが過ぎ越されたように、御子を信じる私たちも彼の血によって、神様のさばきから過ぎ越されるためです。十字架の死後、主は三日目によみがえられました。その後、天に昇り、ご自分を信じるすべての者に聖霊のバプテスマ、つまり、聖霊を与え、それで満たして下さいます。聖霊の助けと力によって、私たちはご自分のすばらしさをわからせることで、最後まで主への信仰に生きる者として下さるためです。

ですから、主が盛んになり、私たち自身は衰えることは祝福といえます。主に望みを置き、信頼して歩む者は、御霊によって主と一つにされているからです。私たちの外側の人、つまり、この肉体は必ず衰えていきます。そして内側における古い人、つまり、自我は衰えなくてはいけないのです。でも、そのような中で、主をお迎えし、主が盛んになることを願うなら、みことばと祈りを通して主により頼むなら、私たちの内なる人は、日々主によって新しくされます。そして、やがて主が再び戻って来られる日には、主と同じ栄光のからだが与えられ、主の住まわれる永遠の都、天の御国へと迎え入れられるのです。

信仰の継承は、この主のみことばによる救いの約束を信じるゆえに、主に対する悔い改めと主の赦しによって、いよいよ自分自身は小さく、滅んでいくことで、でも、そこに主がいよいよ大きく、増えていくことを喜びとし、この方を証することを神様からの使命、また特権として受けとめる人を通して、同じく主の救いを必要としている人々へとなされていきます。世の罪を取り除く神の子羊として来られ、聖霊のバプテスマを授けて下さる主イエスを心からあがめ、人々にこの方を宣べ伝えようではありませんか。